

県中教研 国語部会だより

第 36 号

発行日 令和3年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 津田亜希子
題 字 金山 泰仁 先生

言葉への自覚を高める

指導主事 田近 雅美

学校のICT環境の整備が進み、今年度末までには、全ての小中学校で1人1台端末が配備されることとなりました。国語科においても、これまでの実践を参考にしながら、積極的なICTの活用が望まれるところです。

ICTの活用として、新学習指導要領第2学年「B 書くこと」の言語活動例には「イ 社会生活に必要な手紙や電子メールを書くなど、伝えたいことを相手や媒体を考慮して書く活動」が示されています。

新学習指導要領解説編に「インターネットや携帯電話、スマートフォンによる連絡や交流の特徴である匿名性や即時性、文章量の制限などが、子供たちの人間関係に影響している場合もある。相手や媒体を考慮して書くとは、こうした状況を踏まえ、自分の発信した情報がどう受け止められるかを想像したり、相手の状況や媒体の特性などを考慮したりして書くことである。」とあります。

生まれた時からインターネットが身近にある現代の子供たち。中には普段から電子メールやSNS等で、メッセージをやり取りしている子供もいることが考えられます。そのやり取りの中では、何気なく送った言葉がもとで、人間関係上のトラブルに発展することもあることから、相手の心情を思いやり、言葉を選ぶなど、細やかな配慮がより一層必要になることを心に留めて指導していく必要があります。

言語活動を通して、言葉には人間関係を構築する働きや相手の行動を促す働きがあることに気付く、日頃無意識に使っている言葉について立ち止まって考え、言葉を自覚的に用いる子供を育てることが大切です。情報化社会の進展を踏まえ、社会生活に必要な言語能力を育成するために、言葉そのものを学習対象とする国語科の役割の重要性を、改めて感じています。今後も、これらのことを意識しながら指導を工夫していきましょう。

(東部教育事務所)

言語能力を育成する中心的な役割を担う

部長 津田亜希子

今年度も引き続き、「言葉に対して自覚的に思考・判断・表現する言語活動を通して、国語の能力を高めていくための指導はどうあればよいか」を研究主題とし、「言葉についての課題解決を主体的・対話的に行う授業づくり」を中心に研究を進めてきました。

新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を講じて行われた第64回研究大会で、私が参加した高岡地区の研究授業は、教師の働きかけ、生徒の様子、板書等、三つのスクリーンを活用して映し出されたりリモートでの参観でした。初の試みでしたが、発表する生徒の表情や視線を追うようにアップになるところもあり、臨場感がありました。

また、新川地区では、生徒の語彙への興味・関心を高めるために、使用語彙等を分析する「テキストマイニング」を活用し、視覚的に捉えさせました。例年にない状況の中で行われた研究大会でしたが、それぞれの地区で様々な工夫を凝らし、多くの成果を得ることができました。

今後、1人1台端末と高速大容量の通信ネットワーク環境が整備されていきます。国語科として、付けたい力に対して、これら学びの道具をどのように活用していくか、効果的な活用法について研修し、検討していく必要があります。「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を考える中での効果的な活用について研修を進めていきたいです。

来年度は、中学校学習指導要領が全面実施となります。生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉の関係を言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高められるよう、言語能力を育成する中心的な役割を担う国語科として、これまでの研究の成果や残された課題を基に、今後も研究を進めていきたいと思います。

(高・中田中)

第 64 回 研究

新 川 地 区

(中・雄山中)

(1) 研究授業

佐藤玲未教諭が「推敲して文章を整える」の単元で『『体育大会を通して後輩に伝えたいこと』をテーマに作文を書こう』という授業（3学年）を行った。本時のねらいは、「自分の思いがより分かりやすく伝わる表現や言葉を知り、推敲箇所を見つけることができる」であった。そのための

手立てとして、初めに、生徒たちは提示された二つの作文を比較し、どちらの作文のほうがより思いが伝わるかを発表した。文章中の使用語彙を分析



した資料（テキストマイニング）を見ながら、語彙数や語彙の種類といった推敲の観点を確認した。続いて、班になって三つの表現「胸が高鳴りました」「思わず飛び跳ねました」「天にも昇るような嬉しさでした」の意味を調べた。三つの表現はいずれも喜びや嬉しさを表すが、使用する場面状況やニュアンス等に微妙な違いがあることを理解するという意図があった。終わりに、それぞれの表現を体育大会のどのような場面で使うかを考えた。班の仲間と『『天にも昇る気持ち』は、リレーのときかな』『もっと嬉しいときだよ』『じゃあ、4冠のときかな』と話し合ったり、まとめた意見を学級全体に説明したりするなど、言葉に対して自覚的に思考・判断・表現しようとする姿が見られた。

(2) 研究協議（指導助言）

田近雅美指導主事（東部教育事務所）から、「指導事項（付きたい力）を身に付けるために効果的な言語活動の設定」「学習を焦点化するためのモデル作文の吟味」「着目した表現が視覚的に伝わるようなICTの活用」等について指導助言をいただき、充実した協議が行われた。

佐賀 富春（滑・滑川中）

富 山 地 区

(富・月岡中)

(1) 研究授業

富山地区では、柳原弘彰教諭が「説得力のある文章を書こう」の授業を3年生で行った。単元全体としては、まず『『批評』の言葉をためる』『説得力のある文章を書こう』で、批評文の特徴や作成の手順、評価するための観点や根拠を明確にすることを理解した。次に授業者が用意した「富山県を紹介するポスター」を分析し、批評文を書く学習を進めた。本時では、授業者が作成した例文を基に批評の仕方の工夫点や改善点についてグループで話し合い、自らの批評文の推敲に役立てた。

授業者が吟味して用意したポスターや練られた例文は、生徒達の実態に沿ったものであり、学習意



欲を喚起するものであった。また、批評文の特徴をどの生徒もよく理解しており、主体的で活発な意見交換が見られた。系統的に学び、力を蓄えてきたことが分かる授業であった。

(2) 研究協議（指導助言）

今回の富山地区では、各校の代表者が研究授業及び協議会に参加した。貴重な研修機会を有意義なものとするため、熱心な意見交換が行われた。

指導助言者の中英美主任指導主事（東部教育事務所）からは、「生徒達は、グループ活動において既習内容を生かし、主体的・対話的に話し合っていた。全体での共有に関しては、タブレット端末の有効な活用も含め、今後の課題である。また、次年度からの学習指導要領全面実施を前に、評価についての基本的な考えの共通理解を図る場が必要である。」等の指導助言をいただいた。

岡村 紀子（富・楡原中）

大会を終えて

高岡地区

(高・南星中)

(1) 研究授業

西出裕太教諭による「月の起源を探る」の授業では、「主張を効果的に伝えるための工夫を発見し、その巧みさについて考えよう」という課題を設定し、観点ごとに筆者の工夫点を見付ける活動を行った。導入で、筆者がこの文章を書いた目的やねらいを確認し、全体で共有したことで、作者の意図に沿って表現を振り返ることができ、言葉に対して自覚的に思考を深める一助となった。また、グループごとに各自の発見を交流し、代表者が全体へ広げた。生徒たちは意欲的に課題に取り組み、相互に学び合おうとする姿が見られた。



(2) 部会協議

協議はグループ形式で行った。協議の視点とグループが予め決められており、各グループにアドバイザーを置くことで協議が充実するよう配慮されていた。協議では、工夫点を考える際の観点が教師側から示されていたことの効果と個の学習を全体へと広げるための効果的な発表の在り方等、学習過程に焦点を絞って話し合いが進められた。今回提示された観点は6つあり、学習に参加するという点では担当する観点を指定した意義がある一方で、観点を絞ってしまうことが個の学びを限定的なものにしてしまうのではないかという意見が挙げられた。

(3) 指導助言

指導助言者の北田邦弘主任指導主事（西部教育事務所）からは、ねらいを明確にし、生徒の発言を生かした授業の構成や、生徒同士の関わりを学びにつなげるためにはどうすればよいかをご助言いただいた。また、生徒がそれぞれの学びを自分の言葉で振り返ることの大切さや必要性についても教えていただき、今後の授業づくりにおいて多くの示唆を得た。 江尻 史世（氷・北部中）

砺波地区

(砺・庄西中)

(1) 研究授業

水口功貴教諭が、単元「いにしへの心に触れる」教材「蓬萊の玉の枝－『竹取物語』から」において、「多様な視点から、作品の面白さについて考え、意見を交流する」学習を仕組んだ。

前時まで、生徒は作品に関する資料を読み、自分なりに作品の魅力について考えをまとめた。本時では、映像資料を見て、意見交流の材料を共有した後、学習課題「『竹取物語』が1100年間も語り継がれてきたのはなぜだろう」について、現代や自分との比較をもとにして話し合った。

翁や媼等の登場人物、言葉遊び、月からの使者、天女が羽衣を持ってきたこと等視点を明示することで、関連する意見を出やすくし、生徒の意見も広げやすかった。

全体で意見を交えることで、生徒は、自分だけでは気付かなかった作品の魅力について考えを広げ、さらに、古典への興味・関心を高めることにつながった。

(2) 研究協議（指導助言）

指導助言者の大村吉永主任指導主事（西部教育事務所）からは、授業づくりのポイントについて教えていただいた。授業は「言語活動を通して指導事項を身に付ける」ことが目的であり、生徒が目的意識や場面意識をもって、主体的に取り組めるような必要感のある言語活動を仕組むことが大切である。言葉の意味や働き、使い方に着目して「言葉への自覚を高め」、書くことをベースにして「考えの形成」が分かる思考の蓄積を行っていく指導を継続して行ってほしい。

明日からの授業づくりの意欲喚起となる研究大会となった。 今堀ひとみ（小・大谷中）



下新川郡中教研

「休業中における動画作成や学習課題の提示」

4月から5月にかけて、コロナの影響で授業ができなかった期間、生徒にどのような課題を出すかということ話し合い、情報交換を行った。課題レポートの例として、1学年では瀬尾まいこの「花曇りの向こう」を、1回目は全文を読む、2回目は難語句の意味調べや漢字練習、3回目は感想を書くなど、毎回異なる内容の課題を提示してその学習の積み重ねのレポートを提出させるという実践例が出た。3学年では自分の家で取っている新聞のコラムを読み、視写したり、感想を書いたりしてレポートにまとめて提出させるという例も出た。また、別の中学校では全学年で教材の動画を作成した。3年の谷川俊太郎の「春に」では、詩全体を映し、相反する心情を対照的な色を付けて表現の工夫をおさえたり、使われている表現技法を強調したりした。生徒が取り組みやすく飽きない課題、動画だからこぞできる効果的な映像等、普段できない教材研究ができ、自分たちの研修にもなった。

3学期には、上越教育大学への内留で、「国語科における学習デザイン」について研究を進めている入善西中学校の木村さやか教諭に、他者との対話によって深い学びを生み出す「読みの交流」について伝達講習をしてもらい、研修を深める予定である。 福澤美穂子（下・入善中）

富山市中教研

「新学習指導要領実施に向けて」

今年度は、新型コロナウイルス拡大防止のため部員全体で研修する機会をもつことができなかった。限られた条件下ではあったが、「新学習指導要領」に関して、東部教育事務所の中英美主任指導主事にご講演いただけたことは貴重であった。部員からは質問も飛び交い、研修に参加できた機会を生かそうという意欲がみられた。1月部会ではより深い研修を重ねるため、田近雅美指導主事にご講演いただく予定としていたが、時勢によりかなわなかった。

次年度の準備として各校で年間指導計画を立てるにあたり、新学習指導要領を各自読み込み、また疑問もいろいろと浮かんだ。「指導と評価の一体化」とはいえ、五観点から三観点へと変わる中、特に「評価」について再考し研鑽したこと等、来年度の研修の場で共有できるよう進めたい。また、今年度各校の定期評価の抜粋資料が、研修の一助となってくれることを期待したい。

岡村 紀子（富・楡原中）

氷見市中教研

「ICTを活用した授業」

北部中学校の三崎篤志教諭が「作品の具体的な特徴を挙げ、魅力が伝わる鑑賞文を書こう」という学習課題で提案授業を行った。作品の鑑賞には一人1台配布されたタブレットPCを用い、それぞれが注目した点を電子黒板に一覧で示し、観点に沿って分類した上で、魅力につながる特徴を整理していった。

協議では、タブレットPCを使ったことで、「生徒がどの観点に着目したのかを容易に把握することができた」「話し合いがスムーズに進むだけでなく、自分の意見が全体の中に位置付くことで学習への意欲が喚起される」等の意見が出された。

一人一人が思考・判断・表現する場を保障する学習過程を設定するために、ICTを活用していくことの有用性が感じられる授業であった。今後、付けたい力を確実に身に付けることのできる教材の開発とともにICTをどのような場面で利用することができるか、更に研修を進めていきたい。

江尻 史世（氷・北部中）

小矢部市中教研

「話し合って考えを広げよう パネルディスカッションをする」

津沢中学校の八下田道子教諭が、「部活動やクラブチームの最後の大会で大切にしたいことは何か」というテーマでパネルディスカッションの授業を行った。提案者「A結果」「B内容」「C仲間の絆」の三つの立場から、それぞれの立場のよさを主張し、意見交換を繰り返し、根拠を提示することによって、意見を説得力のあるものにしていった。

司会者は、ワークシートの計画の時間配分に沿ってパネルディスカッションを進めていった。フロアも、パネリストの意見や気付いたことをワークシートにメモすることによって、それぞれの意見を可視化することができた。また、付箋を活用することで、挙手をして発言できない生徒への手立てが為されており、質問を取り上げやすかった。

それぞれの立場で討論することで、いろいろな意見が出され、新たな発見や違った見方ができるようになった。意見を主張した提案者も自分の意見を深めることができたのではなかろうか。

今堀ひとみ（小・大谷中）